

幸田町に行く機会が有った。本光寺宝物と当地出身の殿様の深溝（ふこうず）松平家墓所が圧巻だった。7代島原藩主、松平忠雄の墓から出土した43枚の小判は1枚で約200万円（慶長小判）とのことだ。また、大ぶりのギアマンのグラスはチェコ製で、忠雄が付き合いのあった出島のオランダ人から贈られたものらしい。



また、3代伊忠（これただ）は長篠合戦で鳶ヶ巣山砦を攻略し信玄の弟、信実を打ち取った。しかし、深追いし過ぎて武田方、小山田勢の反撃に会い包囲され39歳で討ち死にした。父の2代好景は44歳で、また、子の4代家忠は46歳でともに壮烈な討ち死をしている。いかに戦乱の世といえ祖父、父、子の3代の当主が皆揃って合戦で戦死するとは過酷な運命としか言いようがない（鳶ヶ巣山砦は自然保護部3月の山行で行きます、関心のある方は部会にいらしてください）。

また、この深溝で全国的にも有名なのが「深溝（ふこうず）断層」だ。しかし近年、この断層は形原断層や西尾断層等とも連続していることが認知され、それらも含めて学術的には「三河地震による地震断層」の一部分と呼ばれることになった。この断層を造ったのは昭和20年1月の「三河地震」だ。この37日前の昭和19年末にも同規模の「東南海地震」が同地域を襲っている。ともに太平洋戦争末期のことで軍部、行政は戦局の衰えが外部に漏れることを恐れ、一切を「極秘」事項にし、隣組などを使って「大地震は恐るべきデマだ」と情報流出を徹底的に押さえこんでしまった。必要な救援活動が出来なかったことは言うまでもない。

当然、地震研究の基礎になる調査活動公開も遅れたが、昭和21年に地震研究所が論文で地表断層を「深溝断層」と命名した。断層は三ヶ根山麓を北側から東側方向に大きく曲線を描きながら幸田町の深溝を経て形原から海中に潜る。「三河地震による地震断層」としては西尾市からの「横須賀断層」を加え総延長28kmに達する。断層地表最大落差は2m、最大横ずれは1m余に達する。三河地震はM6.8の地震で死者約2200名、負傷者約3600名を数えた。昭和50年には愛知県から天然記念物の指定を受け保護整備された。指定地（深溝字小井文字）には石碑、観察木道、変位を示す柱などが有るが、風変わりな湿地のようにも見える。整備のため植生が回復し、貴重な湿地植物も数多く残されているようだ。地震発生から70年を経た現在でも多くの研究者によってこの地域の地震メカニズムや調査が続けられている。研究が一般に公開され、より現実的な防災対策がなされることを望んでやまない。(M)

